

第40回北海道麦作共励会審査報告

令和元年度の第40回北海道麦作共励会の出展者の麦づくりおよび審査結果の概要について審査委員を代表して報告申し上げます。

令和元年産の秋まき小麦は、10a当たり収量581kgで前年対比138%、平年対比でも121%と上回りました。

春まき小麦では、10a当たり収量357kgで前年対比180%、平年対比でも111%と上回りました。

全道の収穫量は、約59万トン、当初約53万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比113%の収穫となりました。作付面積は、約12万haで前年対比100%でした。

一方、品質面では秋まき小麦の1等麦比率が約96%となり、平成27年に次ぐ高い割合となりました。また、基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分では、地域間差はあるもののクリアできました。

春まき小麦では、降水量が少なかったこともあり稈長は低く倒伏は少なかった。また、登熟期間の日照時間は長く、収穫時期の降雨の影響もなく1等麦比率では77%となりました。

秋まき小麦の収量が平年を上回った要因として、登熟期間中の日照時間や日射量が確保された地域が多かったこと。また、4～5月の干ばつの影響もあり止葉が立ち、受光態勢の良い草姿になったことなどが挙げられます。

次に麦作共励会の経過について申し上げます。8月7日に第1回審査委員会を開き、8月8日付けで各関係機関・団体に、後援依頼と参加推進をお願いしました。

秋まき小麦では、全道的に平年を上回る作柄となり関係者の協力で8点の出展となりました。8点の内訳は、第1部（畑地における秋まき小麦）個人で4点、同集団で1点。第2部（水田転換畑における秋まき小麦）個人で1点、同集団で1点、第3部（全道における春播き小麦）個人で1点でした。

11月8日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考しました。その後、12月6日までに現地調査を行い、正式に各賞を決定しました。

以下、最優秀賞者の麦づくりの概要について紹介します。

【畑地における秋まき小麦・個人】部門

旭川市の安田尚弘氏は、水田+畑作+野菜の複合経営を行っています。約43haの経営面積に水稲の他小麦、小豆、ばれいしょ、てんさい、ブロッコリーなどを栽培しています。

令和元年産の収量は11俵で、過去2年の平均では異常気象等の影響もあり振るいませんでしたが、地区平均の1.4倍を超える収量でした。

等級も全量1等、ランク区分も基準値内と申し分のない小麦です。

安定生産を達成している麦づくりの要因として、小麦の収穫後に堆肥を5t/10aを投入し地力維持・向上を目標とし、加えて4年輪作体系を確実に守っています。

また、土壌の保肥力が小さく肥料の流亡が発生しやすいことから起生期以降の追肥を少量ずつ7回行うなどきめ細かな施肥体系を実践しています。

【畑地における秋まき小麦・集団】 部門

士幌町麦作連絡協議会は、士幌町全域をカバーする地域にあって昨年50周年をむかえた12の集団とグループから構成されています。

経営面積は9,138haで、内小麦面積は2,134haです。

令和元年産の収量は、約10俵で全道の平均を上回る収量でした。

JA士幌町の反収は、これまで十勝管内のJAの中で中位に位置していましたが、ここ数年で上位に位置し、特に一昨年は管内でトップとなり、全道でも3番目となりました。

高収量となった要因は、積年の努力にもよりますが、特に小麦の受光態勢に着目した安定多収を目指す技術体系を士幌町麦作連絡協議会が中心となって推進したことによります。

【水田転換畑における秋まき小麦・集団】 部門

そらち南農業協同組合は、栗山町・由仁町全域をカバーする地域にあり994戸の耕作者がいます。

経営面積は8,020haで、内小麦面積は2,088haです。

令和元年産の収量は、約9俵で全道の平均をやや下回る収量でした。ただ、「ゆめちから」の農業特性を考慮すると、不足のない収量と言えます。

JAそらち南は、「ゆめちから」を平成26年産から全面切り替えました。しかし、施肥体系などの栽培技術が未確立であったことから、普及センターと共に播種量・肥料試験を実施し地域の実態に合う栽培技術を確立しました。

その結果、以前より安定した収量を確保できたこともあり昨年産では、平成26年に比べ約500haの面積が増加しました。

高収量となった要因は、前述した施肥体系の他に、大豆間作小麦の推進等により小麦の過作傾向を是正し、輪作体系を改善できたこと等によります。

【春まき小麦における全道一円・個人】 部門

黒松内町の株式会社佐藤農場は、畑作専業経営です。畑の耕地面積は、64haと地域の中でも大規模で、春・秋まき小麦、直播てんさい、大豆、ばれいしょを栽培しています。

令和元年産の収量は、9俵を超える高収量となり、全道平均の1.6倍となりました。また、1～2等麦比率は91%の結果でした。

春まき小麦は、交換耕作により隣町の寿都町に栽培しています。日本海に近く雪解けが早く、その分播種が早く出来るからです。加えて、翌年の小麦畑予定地は、夏頃から事前にサブソイラーを使用して透・排水性を高める工夫をしています。

春の耕起は、パワーハロ1回で碎土・整地を行い土壤に負荷をかけないよう工夫しています。

以上のように、それぞれ受賞された皆さんは、輪作体系を守り、透・排水性対策に腐心し、きめ細かな肥培管理に心がけています。

また受賞された皆さんは地域の仲間を大切に、地域のすばらしい牽引力となっています。これまでのご努力に敬意を表するとともに、この度の受賞を心からお祝い申し上げたいと思います。

最後に本年度の麦作共励会に関係された皆さんにお礼申し上げるとともに、今後とも北海道の麦作振興に尽力されることをご祈念し審査報告と致します。

第40回（令和元年度）北海道麦作共励会審査委員長

北海道農業研究センター作物開発研究領域長 川 口 健太郎